

「第1回FD・SDセミナーに参加して」

学生サポートセンター学生課
安村 朗子

SDとはスタッフ・ディベロップメント（Staff Development）の略で、スタッフの能力開発を意味しているという。私は、この1泊2日のFD・SDセミナーに参加できたことで、常勤職員としての自覚を一層高めることが出来たと思う。

大変恥ずかしいことだが、私が「大学激動の時代」という言葉を知ったのは、昨年冬に常勤職員試験を受験するために、論文を書く練習をする時だった。課題であった「大学職員として如何にあるべきか」を考える時、現在の大学がおかれている背景を知ったのである。ただその時は漠然としていて、「この時代の中で、自分は実際に何をすべきなのか」をしっかりと掴むことは出来なかった。

しかし、今回のセミナーで、多くのことが得られた。まず、広島大学の山本先生のわかりやすい説明を頂き、大学がおかれている激動の時代に、大学改革が社会的にも経済的にも必然であることや、大学が生き残るためのFDやSDの重要性について、大筋で理解することが出来た。

この講義の中で印象に残ったのは、最後の「大学職員の意識改革について」である。「大学の環境変化に柔軟に対応できるスタッフが必要である」という点と、「大学職員に求められているのは、プロフェッショナルを目指すことである」という2点は、これからの常勤職員の目指す大きな指針になるのではないだろうか。山本先生はこの時、他の大学の職員との交流も提起されておいでだったが、このことが実現されれば、更にプロ意識も高まると思う。

また教員の方から、「首都大学東京が目標とする教育」とその取り組みを、現在の状況と問題点やさらに改善策について、実際の授業の様子を交えてのお話を頂いたことで、「首都大学東京」が抱える教育上の課題について知ることが出来た。先生方が考える「より質の高い学生

を育成する」ために、私たち職員が出来ることを考えなければならない。今回の研修がFD・SDと合わせて実施された意味を改めて認識した。

こうした講義の刺激を受けた後のグループ討議は、とても熱のこもったものであった。「魅力ある大学を創るための職員の役割」という議題を通して、情報の共有化や事務の効率化・OJTの実施など職能の向上など、多くの意見が出された。教務、総務、就職、学生課など、視点は様々である。図書情報センター・医務室から見えるものも違う。自分がそれまで考えもしなかった点に気づかされ、大変刺激を受けた。

また、このディスカッションには、常勤職員だけではなく、都派遣職員もオブザーバーとして加わったが、散漫になりがちな意見を上手くまとめてもらえたことで軸がぶれることが少ない討論が出来たのではないかと思う。

今回のセミナーに参加できたことは、本当に有意義だった。上記に述べたように、広く社会的に、また内部から具体的に、多方面から大学について考えることができたからである。以前には漠然としていたものが、少しわかってきた。ただ職場に戻れば、あわただしい毎日に忙殺されてしまう。せっかく高められた問題意識も、個人では維持することは難しいのではないだろうか。

SD、スタッフの能力開発のために、出来れば、これからも定期的なセミナーの開催を望んでやまない。このような機会があれば同じ常勤職員としての連帯感が高まるうえに、また都派遣職員から学んでいくこと出来ると思う。それを生かすことで、さらに法人職員としての一体感も生まれるのではないだろうか。ぜひ積極的に参加して、研鑽に努め、首都大学東京の職員として恥ずかしくない能力をつけていきたいと思う。

最後に、この研修を企画・運営された方々のご尽力に、心から感謝致します。ありがとうございました。